なごや文化情報

2018
9・10
September / October

No.382

NAGOYA
Cultural
Information

随想／ＫＯＵ（ダンサー、振付家）
視点／暑い夏！熱い思い！津軽三味線 名古屋の若手演奏家たち
この人と／森　釗（総合劇集団俳優館 代表取締役）
いとしのサブカル／前田英範（全日本鬼まんじゅう普及協議会）

公財団法人 名古屋市文化振興事業団

2018
9・10
September / October

表紙

作品
猪山
（2015年／木、ブロンズ／90×33×53 cm）

4年前から郷里の御神木の枯れ枝を彫刻しています。
そのためか神様に誘われるように、Uターンしました。
アトリエは山の上のほぼイノシシのテリトリーにあります。

天野 裕夫（あまの　ひろお）

1954　岐阜県瑞浪市大湫町に生まれる。
1997　個展（椿近代画廊）'00　'02　'04　'06　'09　'12　'15
1999　個展（高島屋日本橋店）'02　'05　'08　'09　'11　'14
2005　多摩美術大学工芸科客員教授になる
2008　個展（ジェイアール名古屋タカシマヤ）'11　'14　'16

Contents

名古屋市民文芸祭　小・中学生の部　受賞作品 …… 2
随想　芸術の壁
ＫＯＵ（ダンサー、振付家） …… 3
視点　暑い夏！熱い思い！津軽三味線
名古屋の若手演奏家たち …… 4
この人と･･･
森　釗（総合劇集団俳優館 代表取締役） …… 6
ピックアップ
展覧会を通じて写真史に新たな光をあてる …… 10
いとしのサブカル
前田　英範（全日本鬼まんじゅう普及協議会） …… 11
おしらせ …… 12

「なごや文化情報」編集委員
上野 茂（ナゴヤ劇場ジャーナル編集長）
森本悟郎（表現研究･批評）
山本直子（編集･出版 有限会社ゆいぽおと代表）
吉田明子（人形劇団むすび座制作部長）
米田真理（朝日大学経営学部教授）
渡邉 康（椙山女学園大学教育学部准教授）

「２０１７年　名古屋市民文芸祭」
（第六八回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
川柳の部　受賞作品より　※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆
ドーナツの穴をのぞけば夢がある
椙山女学園大学附属小学校６年　森　實　瑞　佳

◆市会議長賞◆
部活とは絆深める青春だ
名古屋市立天白中学校３年　相　馬　谷　愛　子

◆市教育委員会賞◆
泣いた日々今になっては宝物
名古屋市立天白中学校３年　今　川　雅　陽

◆市文化振興事業団賞◆
おふとんの中はすてきなゆめの国
東海市立横須賀小学校４年　山　口　理　紗

◆名古屋短詩型文学連盟賞◆
戦争が残したものは涙だけ
名古屋市立天白中学校３年　西　村　将　英

◆中日賞◆
本を読むどんな世界もいけちゃうよ
東海市立富木島小学校３年　中　田　栞　奈

随想

芸術の壁

ＫＯＵ（ダンサー、振付家）

14歳からストリートダンスを始め、日本テレビ「ダンス甲子園」にダンスチーム“マイアミフェイス”のメンバーとして出場し、全国大会ファイナリストとなったことを皮切りに、全国のコンテストで優勝。2000年、ストリートダンスのメソッドを発展させた総合舞踊集団「Cakra Dance Company」を結成。徳川幕府開府400周年芸術祭振付。あいちトリエンナーレ出演。インドネシアバリ芸術祭振付出演。韓国釜山国際舞踊祭日本代表招聘。韓国仁川国際舞踊祭招聘。韓国カラフル大邱フェスティバル優秀賞獲得。今年９月にヨーロッパ公演決定など、世界各国でダンスマスターとして、ストリートから総合舞踊まで幅広く活動中。

“芸術とは一体何なのだろう…”そんなことを感じながら、ダンスを始めて30年が過ぎた。もちろん自分なりの解答は持っているつもりでいる。しかし、世間がカテゴライズした芸術の意味とは違っているかもしれない。私は15歳の頃、ストリートダンス、いわば大衆舞踊と呼ばれるダンスを始めた。かっこよさに心を奪われ、当時爆発的に流行っていたこともあり、夢中になって踊り続け、様々なコンテストにも挑戦し、テレビ番組に出るまでにもなった。しかしあまり良い結果は残せなかった。

“既存のスタイルをなぞっているだけではダメだ！”

そんな想いを持ってオリジナルのダンスを創り上げ、テレビ番組に挑んだ。この時、ダンス人生最初の転機が訪れる。全国大会のファイナリストまで行くことができたのだ。技術もまだまだの青二才のダンスがなんと認められたのだった。

当時ストリートダンスは、どこかの国のスタイルをまねることがお決まりで、オリジナルなんて存在してはいけないという、日本独特の“右向け右”文化しかなかった。なので、それに倣いどこぞの国の名前をお借りして、言わば嘘をついて出場したのである。それがウケたのは皮肉でもあるが、大衆が求めているものを青二才ながらも少し理解したのを今でも明確に覚えている。これが私にとって、ダンスにおける芸術の始まりだと確信している。そこから技術を学び直し、舞踊団を立ち上げ、プロとして生きることを決断し、現在に至る。もちろんほんの少し器用になった現在でも、ストリートダンスは私の主流である。ストリートダンスが時代を反映しながら進化していく様は、実に興味深い。それは次の自分を創る原動力になり、無視できない存在でもある。しかし、ここで大切なのは軸そのものを変える提案だ。既存のストリートダンスが進化していく未来は、案外予想はつくもので、個人的にも興味がわきにくい。

ダンスは元々ジェスチャーから始まっている。言葉が生まれ、社会ができ、ジェスチャーがダンスとして進化し、娯楽にもなった現在でも、身体表現としての尊さは根底に存在すると私は思う。今を反映したストリートダンスの軸を変え、創造し、提案すること。そこに新たな芸術が生まれ、また接点ともなる。この接点こそが最も重要で、芸術をどう理解するかの分岐点ともなる。それこそが私が一番伝えたかった“芸術の壁”である。その壁に着目すれば、“自己満足の世界で終わらない”芸術、“表面的な思考で終わらない”文化、両者の未来が変わる。壁をぶち壊す芸術、ダンスにはそれができるはずだ。偉そうなことを淡々と述べてしまったが、今後も壁を壊し続ける欲に素直にぶつかっていこうと思う。

Report 視点

暑い夏！熱い思い！津軽三味線 名古屋の若手演奏家たち

豪快な撥さばきと豊かな音色が魅力の津軽三味線。「津軽じょんから節」や「津軽よされ節」といった民謡はもちろん、歌謡曲の伴奏楽器としてもおなじみです。大みそか恒例の歌合戦で、舞台いっぱいの紙吹雪とともに演奏される…といえば、その響きが思い浮かぶ方も多いのではないでしょうか。

実はここ名古屋は愛好家の数でも、また多くの演奏家を輩出しているという点でも、津軽三味線にとって一大拠点なのです。今回は雪景色とは真逆の盛夏に行われた、若手演奏家のコンサートの模様をお届けします。

（まとめ：米田真理）

全国に拡がる津軽三味線

文字通り津軽地方で生まれ育った津軽三味線。一説では幕末、青森県北西部の五所川原市金木町（かなぎまち）出身の、仁太坊（にたぼう）という人物が始祖といわれています。

この津軽三味線が全国に知れ渡ったきっかけは、昭和40年代の民謡ブームでした。中でも民謡出身で数々のヒット曲を持つ歌手である三橋美智也さんの影響が大きかったようです。

そういう意味では浄瑠璃や長唄、端唄、小唄といった江戸時代発祥の三味線音楽に比べると、津軽三味線の歴史は浅いといえます。とはいえ、現代の多種多様な音楽ジャンルの中では、やはり伝統芸能という印象が強いでしょう。

さて、この津軽三味線は和楽器の分野では珍しいことに、毎年大規模なコンクールが催されています。それも弘前、青森、金木といったいわば津軽三味線の本場をはじめ東京や大阪、倉敷、大津など全国各地で開催されているのです。

ここ名古屋でも毎年「全日本津軽三味線競技会名古屋大会」（以下「名古屋大会」）が盛大に開かれています。平成30年には第12回を迎え、夏真っ盛りの７月29日、小学生から上級者まで個人131名、団体とデュオ計18組が腕を競い、個人部門最上級の一般の部Ａクラスの優勝者には、名古屋市出身の中村滉己さんが14歳の若さで選ばれました。

盛夏の三味線コンサート

さらに、名古屋大会の前哨戦として毎年人気を集めているのが、港文化小劇場で開催される「津軽三味線コンサート～宴～」（主催：名古屋市文化振興事業団）です。今年は７月14日に行われ、客席は超満員の賑わいでした。

この「宴」コンサートは今年で７回目。全国各地のコンクールで入賞経験のある10代から20代の若手たちが、流派や会派を越えて共演できる場として企画されました。今もその思いは受け継がれ、５名の若手演奏家に加え、部活動として津軽三味線に取り組んでいる名古屋西高校津軽三味線部「音見習」の皆さんが腕前を披露しました。

幕開けは全員による合奏『六段』。入門曲とされていますが、哀愁を含んだ調べを力強く奏でる津軽三味線ならではの迫力に、ただただ圧倒されます。続いて、特別出演として民謡歌手の中村仁美さん、踊りの浅野美和子さんが舞台に華を添えました。地元で活躍する民謡歌手の土田真由美さんは、通常とは歌詞が異なるという「じょんから節」を披露。伴奏楽器としての津軽三味線の魅力が伝わってきます。「音見習」は、客席を巻き込んでのパフォーマンス。民謡が、世代を越えて愛される存在であることを示してくれました。

名古屋の若き名手たち

メインである５名の演奏家たちも個性に溢れていま

津軽三味線コンサート～宴～ 2018

す。最年少という稲垣淳也さんは、今回初めて唄を披露しました。先輩たちの愛ある（？）冷やかしから、出演者の仲の良さが垣間見えます。

佐久間翔太さんと加藤弘治さんは、社会人として働きながら、「音見習」の指導も行うという活躍ぶり。音の強弱が巧みな佐久間さん、豪快さが持ち味の加藤さん、ともに多忙な日々だからこそ得られた、いわば集中力の賜物と思える演奏でした。

「宴」コンサートの第１回に出演した演者たちはすでに20代半ばになり、中には社会人になってからは活動を控えざるを得なくなった演者もいると聞きます。津軽三味線に限らずあらゆる芸術・芸能活動にいえることですが、子どもの頃から一心に磨いてきた芸の道を人生の中にどう位置づけていくのか、その問題に直面した若者たちの悩みは察するに余りあります。

そういう意味で、このコンサートに第１回から出演し、プロの演奏家として活躍している杉山大祐さんと佐藤史織さんの存在は、心強い限りです。コンサートの終演後、お話を伺いました。

競い合い、磨き合い

プロの道を選んだ時期と経緯はそれぞれです。杉山さんは、大学卒業後の進路を決める段階で、どうせなら好きなことを仕事にしたいと考えたから。一方、佐藤さんは、幼い頃からピアノなどの音楽に親しむ中で、次第に三味線のアコースティックな響きを活かした音楽をつくりたいと感じるようになったそうです。そう聞くと、杉山さんのジャズを思わせる即興的で自在な音の運び、佐藤さんの緻密に音を重ね紡いでいく音つくり、というそれぞれの演奏に通じるように感じます。

今回、コンサートに出演した５名はいずれも、２週間後の名古屋大会で、最上級部門である一般の部Ａクラス

佐藤史織さんと杉山大祐さん

部門に出場しました。プロも参加するとは意外ですが、大会はステージとは違い、純粋に技術を競う貴重な場なのです。特に名古屋大会は、各部門の優勝者もＡクラスに再出場するシステムになっているので、大いに刺激を受けるといいます。「この子、うまいな～」と思わず感心してしまうような小学生の演奏を聴くと、下の世代に三味線の魅力が伝わっている喜びを感じつつ、負けてはいられないと気が引き締まるそう。杉山さんと佐藤さんも、「宴」コンサートでは和気あいあいですが、その後、名古屋大会が終わるまではライバルなのです。

津軽三味線を、名古屋で

「もし、このコンサートがなかったら、二人が話すことすらなかったよね」と杉山さん。若手たちが会派を越えて交流、刺激し合うことで、この地に津軽三味線が根付き拡がっていくとしたら、快くその後押しをしてくれた師匠たちの功績も、非常に大きいといえるでしょう。そして、佐藤さんによれば、「名古屋はお客さんもいろんな試みを受け入れてくれるので、作曲や演奏が楽しい」とのこと。ますます今後が楽しみな、津軽三味線の世界です。

公演の様子

この人と…

総合劇集団俳優館 代表取締役

森（もり） 釗（つとむ）さん

尽きぬ演劇への情熱

毎年次々と新しい作品を世に送り出し、複数年にわたる長期ワークショップを実施するなど演劇人を育てる活動に尽力。さらには、一人語りの作品をプロデュースし自らも出演している。森さんのその旺盛な企画力はとどまるところを知らない。名古屋演劇界の重鎮として第一線で活躍を続けるエネルギーの秘密をお尋ねした。

（聞き手：吉田 明子）

演劇人としての原点となった？幼少期

森さんは、1935年12月に名古屋市東区車道町に誕生。父は森さんが3歳の時に亡くなり、母は森さんを連れて中区南園町（現在の中区栄1丁目）の実家に移り住んだ。非常に賑やかな繁華街にあり、御園座のすぐ近くであったことから、芝居好きだった祖母が御園座によく森さんを連れて行き、4、5歳のころから歌舞伎をたくさん観させてくれた。近くには映画館もあり、母とよく出掛けた。当時の大衆的な文化環境の中で過ごしたが、その家も1945年3月26日の空襲で燃えてしまった。森さんはその前年、海部郡蟹江町に学童疎開し、終戦もそこで迎えた。

幼い頃

映画に熱中した中・高時代

中学2年生から映画にのめり込み、高校2年生までは学校が終わると近鉄に乗り名古屋まで出て来て、土日は欠かさず映画鑑賞。名作映画はほとんど観つくした。勉強はまったくせず、映画ばかり観て、ジャズやクラシックを聴いた。「当時は音楽の同好会があり、お金を出し合って生の舞台に触れることができたんだ。今思うと労音（勤労者音楽協議会）の前身かな？」

高校3年生になって、ふと周りをみると同級生の目の色が変わっており、「大学に行くなら勉強しないといけない」と思った。それで1年間は映画を絶ったが、受験が終わった日にはミリオン座に駆け込んでいた。

大学1年生の頃

演劇との出合い

受験勉強の甲斐あって、名古屋大学（名大）文学部に入学。ヨット部に入部したが、演劇部の部室と隣どうしで、たまたま演劇部のポスターを見た。ロマン・ロランの『時は来らん』を上演するとのこと。外国文学が好きなので観にいき、自分でもやりたくなり演劇部に入部。20歳の時だった。「そこから怒涛のごとく芝居にのめり込みましたね」と森さん。

文学部哲学科の専門課程に美学美術史という講座（ゼミ）があった。そこには芝居や音楽、映画に関心のある人がたくさん集まり、みんなが自分のやりたいことを自由に勉強していた。「おもしろかったよ、あの時代は。僕は演劇を専攻し、演劇部では演劇をやり、演劇三昧だった。学問として演劇を研究したいという方向性を見つけたんだ」

学生時代はテレビのエキストラのアルバイトをしながら、卒業後も半年ほど研究生として大学に残り勉強を続けた。テーマは戯曲論と日本芸能史。名大には大学院がなかったので、１年勉強して東京大学か京都大学の大学院に行こうかと思っていた。しかし、名大の学生部に勤務することに。貧乏に勝てなかったのと結婚相手がいたからだ。学生部では教務、入試の仕事の他に、学生相談・留学生の仕事も担当した。

プロの演劇人へ

そのころ、「劇団なかま」というアマチュア劇団でも活動をしており、東区のお寺を稽古場にしていた。プロとして今の仕事をすることになったきっかけは当時ＣＢＣに勤めていた、しかたしん氏（児童文学作家・劇作家）との出会いだった。しかた氏は「劇団かもめ」という別の劇団で活動していたが、同じ稽古場を使っていた。

名古屋劇団協議会の合同公演で『森は生きている』を上演した時に、しかた氏に「一緒に制作をやろう」と誘われた。「しかたしんが俺をだましたんだ（笑）」と森さんは冗談を交えて語った。

名古屋演劇鑑賞会（名演）は1954年に設立されたが、設立当初は組織を運営する経験不足もあり、低迷する時期もあった。しかし高度成長期の真っ只中にあった1961年には、労働組合活動が活発になるにつれ、名演を含めた全国の演劇鑑賞会も活性化していった。名演が活動を再度本格化させる時に、運営の幹部だったしかた氏から「手伝ってほしい」と再び声がかかり、そこから名演の活動にまい進していった。

名演の運営委員として活動し、公演の企画などを担当する中で、学生時代に勉強した知識を試すことができた。また逆に芝居づくりの知識を東京の劇団の制作者や演出家たちから学んだ。「役者たちはもちろんのこと、それよりも制作者や演出家、脚本家と話がしたかったんだ。様々な制作者や演出家と話す中で芝居づくりの大切な部分、勘所を学ぶことができた。とりわけ民芸の宇野重吉さん、文学座の杉村春子さん、青年座の東恵美子さんにいろいろ教わったことは大きかった。それが今に生きている」。そのころに知り合った劇作・演出家のふじたあさや氏とは今に至るまで、ともに創作活動を続けることになる。

名古屋演劇鑑賞会運営委員長時代

名演会館建設

1969年名演が設立15周年の記念事業として、地元の演劇の拠点となるホールや集会室などを備えた名演会館の建設を提唱。それが始まりとなり、地元劇団、芸術団体、学者、文化人、勤労者、市民など数多くの人々の資金協力により、1972年名演会館が竣工。客席数200席足らずの小劇場と会議室からなる５階建てのビルが完成した。

「名古屋の劇場難、集会室難を何とか切り開こうとする姿勢と、演劇運動の歩みの中で、戦前の築地小劇場や戦後の俳優座劇場の果たした創造的な仕事に学び、名古屋においても優れた演劇・文化の創造に役立つ拠点たり得るものをつくりだそうとする情熱が大きくはたらいたんだね」と森さんは語る。

全国の演劇鑑賞会で初めて自前で所有することになった劇場であり、開館して４ヵ月の間に愛知・岐阜・三重の地元７劇団が、ほぼ１か月にわたる柿落（こけら）とし公演に参加し、５千人を超える観客動員を実現した。

森さんは1970年に名古屋大学を退職し、同年名演会館の専務取締役に就任。名演会館の館長を務め数年後には代表取締役に就任した。

名演会館では、演劇の公演を主に、音楽会、映画会などの催しや各種サークルの会、研究会、団体の集会、会費制の結婚式にいたるまで、実に様々な行事が行われ

た。その一方、客席数は限られているため、経営的な面では厳しい部分があり、経済的にも成り立つ方策を一生懸命考えた。

名演会館時代も、『三人姉妹』、『フィガロの結婚』、ミュージカル『ファンタスティックス』など多くの作品をプロデュースしたが、1982年名演会館の代表取締役を退任。

名古屋舞台芸術協会と俳優館の設立

1983年に（株）名古屋舞台芸術協会を設立、代表取締役就任。朝日新聞社が主催した海外バレエ団の名古屋公演や名古屋市文化振興事業団企画公演『三文オペラ』のマネージメントなどに携わり、そのかたわらでプロデュース公演も行った。初期の頃の主な作品は『ある馬の物語』『からゆきさん』『アニーよ銃をとれ』など。

「舞台芸術協会はいろいろなことができる組織だが、芝居をつくるには、“芝居をつくるという純粋な組織”でなければならない」と、日本を代表する劇作・演出家のふじたあさや氏をはじめ、鈴木完一郎、菊本健郎の各氏、そして森さんの4人が同人となり演劇創造部門を独立させ、1986年総合劇集団俳優館を設立し、養成所も作った。俳優館設立後はすべての公演作品を企画、制作。

名古屋にまた新劇団

ミュージカル中心の「俳優館」

オーディションで団員を募集

俳優館誕生の記事

俳優館の作品「ガラスのうさぎ」に父親役で出演

第1回公演は1987年『さんしょう大夫』。第2回『カレーライス物語』で大成功を収める。『ガラスのうさぎ』も大好評。1993年初演の『ごきげんなすてご』は、全国の鑑賞組織である子ども劇場・おやこ劇場で4年間に500ヶ所で公演。「当初5年間だけ頑張ってみようと目標を立て、なんとか食いつなぎ5年たった。だったらあと5年やっていけるだろうとまた5年」と森さんは笑った。

愛知県芸術文化選奨、松原・若尾演劇賞受賞

＜多年にわたり、当地域の演劇制作に携わり特に児童劇ミュージカルの脚本家としてアイデアに満ちた楽しい作品を手掛け、制作者としてもオリジナルな企画作品で自ら代表を務める総合劇集団俳優館の公演を行うなど多くの人に支持され、高い評価を受けている。また、愛知県を中心にした全国巡回公演活動や新人養成のワークショップを行うなど演劇芸術の普及と後進の育成に尽力＞として、2003年度愛知県芸術文化選奨文化賞を受賞。「プロデューサーは脚本、演出家の手配やキャスティングから金の工面まで、苦労は山ほどあるのに理解されにくい陰の存在。そんな仕事にスポットが当たったのが嬉しかった。制作者を志す若者の励みになっていれば幸い」とのこと。

また、2012年には『新劇100年 珠玉の一幕劇集』の企画、製作により第16回松原英治・若尾正也記念演劇賞も受賞。長年にわたる森さんの当地域の演劇界への功績が高く評価された一例である。

旺盛な企画力

俳優館では基本的に年に2回本公演を行っている。夏休みファミリー劇場（ミュージカル）と演劇人を育てる新進芸術家育成公演で約20ステージ。両公演とも俳優館の俳優を中心に、出演者を公募して行うプロデュース公演で『はだしのゲン』『夏の夜の夢』など出演者50～60名の大作を上演。その他スタジオ公演などの小公演が10ステージ、学校公演などが20ステージで合計50ステージほど。現在、客演を含めた俳優館の構成人数は約20名。養成所では毎年卒業公演を実施し、通算の卒業生は約200名にのぼる。

締めくくりに、長年にわたりたくさんの作品を生み出し続けている原動力についてお尋ねした。「さあ、なぜだろう。頭の中にいつも嵐が起こっているという感じかな？ 僕はあんまり嫌いな人がいない。人と一緒にいることが結構好きなんだ。いろんなことが頭の中に浮かんできて、それがしばらくすると“あ、これをやったらどうだろう。やってみようかなぁ、どんな時にやったら良いかなぁ。誰とやろう…”と考えがまとまってくる。そして段々具体化していく。頭に浮かんでから固まっていくまで3ヶ月くらいかかり、企画がスタートしてから初演までだいたい1年半くらいかかるね」

嬉しいときややりがいを感じるときは、との問いには「つくった舞台の反応が良くて、お客さんがたくさん入

った時が最高。すべてのお客さんが良かった良かったと言ってくださったとき」と答える。

「芝居づくりについては、僕は演出家に結構注文をつけます。つくる前に“僕はこういう風にやりたいんです”と。あまり細かいことにはこだわらないけれど、言い出しっぺだからそこには忠実になろうと思っている。また、制作の仕事は意外と創造的な仕事なんだと思う。発想力、体力、タイミング、もちろん技術も。芝居は分業はあるけど境界線はない。気持ちと気力さえあれば、才能のことはさておいても、誰でも劇作できるし、誰でも演出できるし、だれでも俳優にもなれるという身近な芸術だと思う。だから厄介だ。プロデューサーはそのあたりをかいくぐって才能のある演出家、作家、俳優を見つけ出さねばならない。権威とか先輩とかただ長くやっているだけの経験は要らない。しかし、皆なかなかプロデューサーはやりたがらないね」

「第44回秋の名寿会 踊り おどり オドリ」にて　故・花柳磐さんと愛知県芸術劇場小ホールの舞台でトーク

『はだしのゲン』を一人語りで上演

以前ミュージカルとしてつくった『はだしのゲン』を、この９月に一人語りで上演。自ら台本を書き、出演。演出はふじたあさや氏にお願いした。(脚色・演出を手掛ける際のペンネームは三樹健)。

「怨念だとは言われたくはないが、僕らの世代は戦争を体験している世代だから、戦争が人ごとではない。今は戦争の芝居から逃げたい人が多い。悲惨なものから目を背けたいのは当たり前のことだが、戦争被害を描くことによって、戦争がいかに非人道的で悲惨なものかがわかる。戦争被害の最たるものは原爆だと思う。『はだしのゲン』をやるべきだと思ったのは、原作者の中沢啓治さんがご存命だった時に何度か話したことがあり、そのころすでに『はだしのゲン』が世の中で歓迎されない雰囲気があった。中沢さんはそれを感じ取っていて、「どうぞやってください」と言われた。そのために一人語りにして、俳優館のスタジオで公演し、お寺の本堂でもやる。会場はどこでも良いし、できれば旅回りに行きたい。残り少ない命を『はだしのゲン』で回りたいね」と作品にかける想いを語った。

芝居に関わって62年。森さんにとって芝居とは“人生のまぼろし。まぼろしの中で漂っているもの”であるという。体制におもねることなく、時には眼光鋭く時流を読み解く森さんが、照れたように笑った。

一人語り・Ｓｏｎｇ「はだしのゲン」

2018年度の公演一覧

＊文化庁・公益社団法人日本劇団協議会主催「日本の演劇人を育てるプロジェクト」
複数年ワークショップ＆公演 公演は2019年12月イタリア喜劇「アルレッキーノ」原作：カルロ・ゴルドーニ　演出：大谷賢治郎

＊小学校巡回公演 ミュージカル「あらしのよるに」
原作：きむらゆういち　脚本：三樹健　演出：ほりみか

＊本公演 「コーカサスの白墨の輪」８月２日～５日
千種文化小劇場　上演台本・演出：なかとしお

＊小会場公演 「わたしの昆虫記」 ９月20日～23日
ひまわりホール　作・演出：右来左往

＊「はだしのゲン」～一人語り＆ソング＆バイオリン演奏～
９月 俳優館スタジオ 台本：三樹健　演出：ふじたあさや　出演：もりつとむ、TERRA

＊朗読劇場 「太宰治を詠む」シリーズ　11月・12月
俳優館スタジオ

前号（No.381号）の「この人と…」の能楽師・久田勘鷗さんの記事（P.9）において誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

（誤）「この秋、＜道成寺＞を舞うんだよ。赤頭でね」。ベテランにつきものの、重い「白頭」ではない。主人公の鬼性をクローズアップした「赤頭」である。

（正）「この秋、＜道成寺＞を舞うんだよ。小書きはなし。普通でね」。(ベテランにつきものの…以下削除)

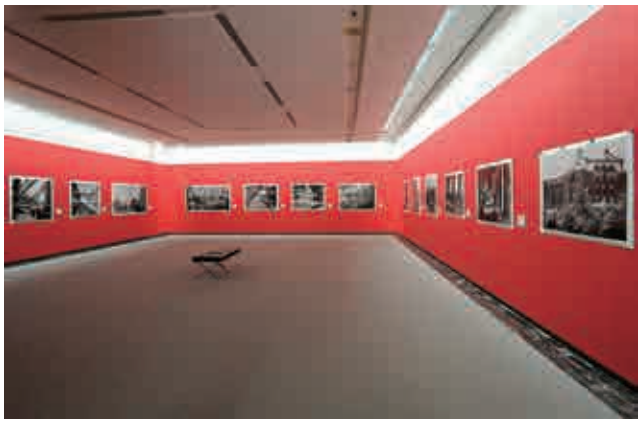
―公演のご案内―
＜姫町能＞能「道成寺」 シテ 久田勘鷗
９月24日（月・祝）13:30～　名古屋能楽堂

ピックアップ

竹葉丈 名古屋市美術館学芸員

展覧会を通じて写真史に新たな光をあてる

満洲は現在の中国東北部に位置し、日露戦争後ロマノフ王朝の有していた権益を日本が引き継ぐとともに日本人の移植が始まる。1932年、日本の傀儡国家「満洲国」が建国されるも第二次大戦敗戦に伴い消滅する。この日本支配下の満洲地域を写真がどのように表象したのかを、写真と映像を含む資料によって見せたのが昨年、名古屋市美術館で開催された「異郷のモダニズム―満洲写真全史―」展である。同展は写真史のみならず政治史・文化史にも新たな知見を与えるものとして高く評価され、『日本写真年鑑2018』（日本写真協会）では４人の評者が2017年ベスト３に選び、企画者である竹葉丈学芸員は2018年日本写真協会賞学芸賞ならびに第30回写真の会特別賞を受賞した。



「異郷のモダニズム―満洲写真全史―」展
Ⅴ．廃墟への「査察」―ポーレー・ミッション・レポート

竹葉氏は1961年大阪生まれ。名古屋市美術館開館前年の’87年に着任。最初に手掛けた展覧会が「名古屋のフォト・アヴァンギャルド」展（’89）で、写真誕生150年※に合わせ、1930年代からシュルレアリスムや抽象美術の影響下で個性的写真表現を追求した写真家たち（坂田稔、下郷羊雄、田島二男、山本悍右、後藤敬一郎）にスポットをあてた。以後、彼らの先行世代であり日本の絵画主義写真に多大な業績を残した「日高長太郎と愛友写真倶楽部」展（’90）、淵上白陽に代表される立体派や未来派の影響を受けた絵画主義写真「構成派の時代」展（’92）を企画。

1994年の「異郷のモダニズム―淵上白陽と満洲写真作家協会―」展は上記展覧会を準備する中から生まれたもので、それまでの３展覧会を質量ともに凌駕するばかりか日本写真史に新たなページを加えるものだった。その後写真に関わる重要な展覧会である「生誕百年安井仲治展」（’05）、「躍動する魂のきらめき―日本の表現主義―」（’09）、「絵画と写真の交差―印象派誕生の軌跡―」（’09）の企画に参加し、「写真家・東松照明　全仕事」（’11）を企画した。「淵上白陽と満洲写真作家協会」展から20余年後、その後の調査・研究成果を盛り込んで開催されたのが、冒頭に述べた「満洲写真全史」展だった。両者には内容の重なるところも多いが、何より淵上渡満以前の櫻井一郎による「亜東印画協会」の写真と解説文、終戦直後アメリカが送った対日賠償に関するポーレー調査団撮影の写真を付加することで、「満洲写真」の全貌を提示してみせたのである。竹葉学芸員が次に用意している展覧会が何かはわからないが、期待して待ちたい。　（M）

※フランス人ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール発明の写真術ダゲレオタイプ発表（1839）からの起算

いとしのサブカル

名古屋が誇るB級グルメ「鬼まんじゅう」を全国に！

全日本鬼まんじゅう普及協議会

前田 英範（まえだ ひでのり）

名古屋生まれ、名古屋育ち、名古屋の会社に勤める。子供の頃から慣れ親しんできた鬼まんじゅうが全国区ではないことにある時気づき、衝撃を受けて普及活動に入る。

みなさん、鬼まんじゅうを召し上がっていますか？秋口になると、和菓子屋さんの軒先に＜鬼まんじゅう＞と染めた幟が立ちますね。あー秋になったんだな、と感じますが、こんな風物詩は全国津々浦々どこででも展開している…と思い込んでいるあなた。実は大間違い。鬼まんじゅうは名古屋をメッカとした、東海地方のローカルフードだったんです。ある時、会社の仲間に鬼まんじゅうを差し入れしたら、なんと、

「何これ？」
私：「鬼まんじゅうじゃん」
「鬼？どこが鬼なの」
私：「…」
「どこがまんじゅうなの」
私：「…」
「見たことない」「食べ物？」
私：「…」

後で考えてみたら、その時の仲間は全員が東海地方以外の出身者でした。さつま芋と小麦粉と砂糖という普遍的な食材からできている鬼まんじゅうが、全国的には全く認知されていないのです。この事実に衝撃を受け、全日本鬼まんじゅう普及協議会を設立し、ウェブサイトを立ち上げて以降、研究と普及活動を続けております。はい、細々と。

ウェブサイトでは、鬼まんじゅうを販売しているお店を100店ほど紹介させていただいています。東限は豊橋、西限は桑名、北限は飛騨萩原といったところで、愛知、岐阜、三重といった普及の境界を越えるお店をご存知であれば是非ご一報を。

鬼まんじゅうを季語にするならば、間違いなく秋でしょう。新芋は6月頃から出回るそうですが、夏はちょっと食欲が湧きませんよね。芋が細ると言って12月頃にはやめてしまうお店も多いです。年中出回っているものと思っていたので、調べてみてこれも意外でした。もちろん年間をとおして販売しているおいしいお店も沢山あります。

経験上、栗きんとんを出すような高級店ではまず鬼まんじゅうは売っていません。あくまでもB級。だけど、つんと澄ましていないところがいいんじゃありませんか。芋の種類、時期、砂糖や小麦粉の配合などにお店ごとの工夫があって、こだわりに敬意を表します。何も混ぜ込んでいないプレーンタイプのものが主流ですが、黒糖、抹茶、コーヒー等、変化球が多いのも楽しみのひとつです。かつて、名古屋三越や近鉄パッセに出店しておられた「鬼作堂」さんのヴァリエーションは、りんご、栗、わらびなど素晴らしいものでした。復活を心から願っています。

鬼まんういろ、鬼まんロール、鬼まんポテト等、独自の進化を遂げた商品もあります。「鬼まん」で通じるあたり、この地方で愛されている証しですね。

ところで、なぜ鬼まんじゅうという名前なのか。一応さつま芋の角切りが鬼の角を連想させるから、というのが通説ですが、角2本でもないし、「まんじゅう」の解明がありません。まだまだ謎は多いですが、謎は謎のままの方が楽しいのかもしれません。

レニエさんの鬼まんロール

筒井松月さんの鬼まんじゅう

平成30年8月25日発行（隔月1回25日発行）通巻382号　編集発行／公益財団法人 名古屋市文化振興事業団　〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号　TEL(052)249-9385　FAX(052)249-9386　HP http://www.bunka758.or.jp/

写真：青木信二

人形浄瑠璃

文楽

2018年 10/5（金）

人形浄瑠璃「文楽」は、日本を代表する伝統芸能の一つで、太夫・三味線・人形が一体となった総合芸術です。太夫の語り、三味線の音、3人遣いの人形で複雑なドラマを表現します。解説では、文楽のあらすじを出演者がわかりやすくお話しし、みどころをお伝えします。
今回の公演も、電光表示パネルを舞台下手脇花道に設置し、初めて鑑賞する方でもお楽しみいただけるように字幕を表示します。

昼の部 ❖14:00開演
義経千本桜（よしつねせんぼんざくら） 椎の木（しいき）の段
すしやの段

夜の部 ❖18:30開演
義経千本桜（よしつねせんぼんざくら） 道行初音旅（みちゆきはつねのたび）
新版歌祭文（しんぱんうたざいもん） 野崎村（のざきむら）の段

会　場 名古屋市芸術創造センター

料　金【全指定席】
一階席　一般 4,700円　友の会 4,200円
二階席　一般 2,900円　友の会 2,400円
※未就学児の入場はご遠慮ください。

チケット取扱い
●名古屋市文化振興事業団チケットガイド
TEL：052-249-9387（平日9:00～17:00／郵送可）
そのほか事業団が管理する文化施設窓口（土日祝日も営業）でもお求めいただけます。
●チケットぴあ（Pコード：487-657）
TEL：0570-02-9999
※サークルK・サンクス、セブン-イレブン、中日新聞販売店でも直接お求めいただけます。

主　催 公益財団法人名古屋市文化振興事業団／公益財団法人文楽協会

環境にやさしい企業を目指します

わたしたちの会社ではISO14001を取得、
印刷にかかわる制作から配送まで、トータルで環境に
やさしいシステムを構築、環境負荷低減印刷を目指します。

中日高速オフセット印刷株式会社
〒462-0847 名古屋市北区金城四丁目3番19号
TEL (052)914-1711　FAX (052)914-7913
http://www.c-offset.co.jp
ISO 14001 JQA-EM3417　プライバシーマーク 19000485

舞台VTR映像専科
ステージの感動を格調高い映像で追求します。

ビデオソフトの企画制作
有限会社 エーワン.ビデオ.システム
TEL (052)896-2256　FAX (052)896-4100

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ
20Hz ← → 20kHz
この領域を超えて最高のパフォーマンスを。
A&V PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400　FAX/052-761-0909

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。
ナゴヤ劇場ジャーナル
◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・舞踊・音楽公演・ホール、DM等にて配布
公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命下さい
MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ
〒461-0004 愛知県名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵305
TEL (052) 508-5095　FAX (052) 508-5097
URL http://www.mane-pro.com
業務内容 ①舞台の企画・制作マネージメント ②イベントの企画制作 ③芸術団体のコンサルティング ④舞台・イベントの運営
マネっちゃ

デザイン・印刷／中日高速オフセット印刷株式会社